

⑧ 仙人峠の秀衡街道



仙人峠頂上付近の秀衡街道

霊峰仙人山の北尾根に位置する秀衡街道の仙人峠標高四三六mは、旅人の疲れをいやす空間が広がる。峠までの山道は険しく秀衡街道最大の難所といわれた。明治七年岩手県が仙人権現(現久那斗神社)の東西三・三km区間の勾配を十五%以下にし、道幅三・六mに改修したが車馬の通行はできず、平和街道が開通する同十五年まで待たなければならなかった。

⑨ 大荒沢地区に新ルートを開設



新ルート開削作業

仙人峠から大荒沢集落跡までの秀衡街道は、小松沢に沿って稲妻状に屈曲し、その先は湯田ダムに水没している。秀衡街道探査会は平成九年から新ルートの開設に取組んだ。国有林地のため許可を得て作業を行ない、三年後に1kmの迂回路を開削した。

⑩ 大荒沢銅山製錬所跡

平泉藤原氏時代の金山の一つ。後世には主に銅鉱の採掘に変わる。明治十七年齋藤辰五郎(北上市)が起業。同四十三年以降は藤田組が経営。大正六年の生産高は二二・五t。従業員数は千人余。からみ煉瓦で造られた二基の煙道が往時を偲ばせる。新秀衡街道は製錬所跡を通る。



大荒沢銅山製錬所の煙道と煙突跡

⑪ 峠山の二里塚

江戸時代、仙人峠から峠山の板敷野に至る秀衡街道は仙北街道と呼びかえられていた。元文四年(一七三九)沢内代官所書上絵図には、脇往還として仙北街道が記され、峠山里塚(西和賀町指定史跡)が確認できる。築造は江戸前期と思われる。



仙北街道の里塚(江戸時代)

⑬ 鷲之巢金山緑青抗跡

秀衡街道沿いには鷲之巢(風倉山秀衡堀)や安久登沢(金商吉次の隠し金山)、草井沢、大石沢、大荒沢などの金山が平泉藤原氏時代にあったと伝えられる。鷲之巢金山の赤倉鉱床緑青抗には、岩盤に蜂の巣状に開けられた坑道「たぬき堀」跡が残っている。坑道は人がやつと通れる大きさである。鷲之巢の金鉱脈は周りの母岩にも含まれているのが特徴で、近代採掘により拡張された所もある。大正六年の鉱主は共立鉱業。従業員数は五三〇人で大部分は和賀郡と秋田県出身者であった。



秀衡街道鷲之巢口

⑫ 峠山から鷲之巢口へ

峠山板敷野から南本内川河口を渡って、岩盤が滑らかに傾斜する岩滑沢をさかのぼる。道は西へ向い小峠を越えたと鷲之巢金山跡が正面に迫る。秀衡街道の鷲之巢口である。

鷲之巢金山緑青抗跡



⑮ 秀衡街道沿いにあった巢郷集落

秀衡街道は国境付近で北側を通る白木峠越えの仙北街道と混同される。秀衡街道は南側の越中畑・野々宿・巢郷として国境を過ぎて上黒沢への道筋である。巢郷集落は昭和五十年頃まで秀衡街道沿いにあったが、現在は国道一〇七号沿いに移転した。



昭和40年代の巢郷集落

⑯ 巢郷に祀られている道祖神

巢郷集落の北側、秀衡街道の小川に1mにみえない石橋があり、東脇に「神様」と呼ばれる石仏が祀られていた。石仏は通行安全、悪疫防止をつかさどる道祖神で、彫像は不動明王像である。上黒沢の当麻曼荼羅(たいまんだら)詣をする西和賀町の人達が昭和三〇年代までこの道を往来していた。



道祖神の石仏

⑭ 峠山の大標柱



青森のひばの古材で造った大標柱

今は林道となつている秀衡街道の峠山(標高五二五m)は、鷲之巢から甲子(かつし)を経て湯川温泉に出る途中にある。昭和初期朝鮮人技師が立てたコンクリート製の「日の峠神」の標柱は残っているが「峠山」と正しくなく、湯川地区の有志が土畑鉱山から青森ひばの古材をもらい受け平成七年に建立した。

